

原田 稔名誉教授記念号の発刊によせて

学長 山田家正

このたび、「人文研究第101輯」を発刊するにあたり、本学の教育研究に多大な貢献をされた小樽商科大学名誉教授原田稔先生のご業績を讃え、本号を「原田稔名誉教授記念号」とすることに致しました。

原田先生は、昭和36年3月に北海道大学理学部物理学科をご卒業、同大学院理学研究科物理学専攻修士課程に進学され、昭和41年3月に同博士課程を単位取得退学されました。同年4月に直ちに本学商学部講師（一般教育等、物理学担当）として着任し、本学教官としての第一歩を踏み出されました。翌昭和42年3月に理学博士（北海道大学）の学位を取得、同年10月には助教、昭和55年1月に教授に昇任されました。この間、昭和44年9月からの1年間を、物理学研究の拠点の一つであるデンマーク、コペンハーゲン大学ニールス・ボーア研究所で研鑽を積まれました。平成12年3月末日をもって停年によりご退官されましたので、本学には34年間もの長期間に亘り勤務して頂いたこととなります。この間、学科主任をはじめ、各種委員会委員として大学の運営にも力を尽くして頂きました。

これらのご功績に報いるために、本学教授会はご退官直後の平成12年4月に原田先生に対して名誉教授の称号を授与したところであります。

原田先生のご専門は、理論物理学、特に原子核理論、相対性理論の領域であって、Brueckner理論の研究及び相対論におけるパラドックスの研究に没頭されました。それらのご業績等については、他に譲りここでは触れませんが、原田先生のおよき共同研究者でもあるニューヨーク州立大学のメンデル・サックス教授が数年前に本学に来学された折に私もお目にかかり、その時のお話しでは、“相対論について独自の考えで側面からアプローチする点で原田の研究は価値がある”とのことでした。この研究分野は、自然科学の中でも、

“ひらめき”と“独自の理論”がなければ論文が全く書けないことは、門外漢の私でもある程度は理解できますが、サックス教授の感想から原田先生のお仕事を高く評価しておられることが理解できました。社会科学系大学にあって、研究仲間もいない孤独な環境について、むしろ雑音に悩まされずに恵まれた研究環境であったとご退官の時に述懐されたことは、研究者にとって示唆に富むものと思い、私の心に残っております。

本学の学生にとっては、難解な学問分野であったかとは思いますが、知的好奇心を刺激する講義は定評がありました。ご退官後も研究教育のお仕事を続けておられ、最近頂戴したお手紙にも、少しも暇にならないとのことでした。これは大いに祝福すべきことでしょう。

今後の益々のご発展とご健勝を祈念申し上げて本輯発刊のご挨拶と致します。